

いのち 生命のにぎわいとつながり

No.32

平成25年3月

今年は、例年に増して厳しい寒さが続きましたが、二十四節気の一つ春分を過ぎてからは、かけ足の春到来となりました。生命(いのち)のにぎわい調査団員からも春を告げる生物の報告がたくさん届いています。まさに春本番です。

本号では、房総の里山とトキやコウノトリのかかわり、またこれを豊かな生物多様性のシンボルとする生態系ネットワークづくりを紹介するとともに、生命(いのち)のにぎわい調査団の現地研修会の開催結果や生物多様性シンポジウムの開催結果についても報告します。

泉自然公園(千葉市)

トキ、コウノトリのふる里、房総の里山



図1. 時田直善画伯が1948年に市原市に飛来したトキを目撃し、それをモチーフに描いた作品「寧日/鶺鴒の3」1986年作(市原市 蔵)。

房総半島・千葉県では、自然と調和した人々の暮らしのなかに、集落をはじめ森林や田畑、草原、川沼から海岸、海域に至る多様な環境モザイクがセットとなった持続可能な生態系、里山里海が育まれました。そこは生物多様性豊かな環境であり、かつてはトキやコウノ

トリの生息地でもありました。市原市五井では 1948年2月と1953年12月にトキの飛来が記録されており、これは太平洋側での最後のトキ生息の記録となっています(図1)。コウノトリについては、しばしば県内に飛来し、最近では2011年4月に茂原市などで飛来

CONTENTS

- 1 トキ、コウノトリのふる里、房総の里山 1
- 2 生命(いのち)のにぎわい調査団で現地研修会を開催しました! 3
- 3 生物多様性シンポジウム「外来生物と印旛沼 一生きものが語る印旛沼の現在(いま)と未来—」を開催 3
- 4 千葉県の外来種(アメリカオニアザミ) 4

が確認されています。

特に、稲作が始められた場所でもある谷津田は、湧き水が豊富で水辺の動植物の宝庫でもあります。トキやコウノトリのようにタニシやドジョウ、水生昆虫等を餌とする鳥たちにとってこの谷津田は格好の餌場であり、また周りの森はこの上ないねぐらや巣作りの場でした。県内には「鶺谷(とうや)」や「鶺崎」「鶺嶺(ときがね)」といった地名が残され、「鶺田」「鶺矢」の名字も多くみられます。また「鶺ノ巣」や「鶺巣台」の地名、「鶺池」、「鶺田」などの名字もあり、トキ、コウノトリと人との深いかかわりを伝えています。

●古墳が守るコウノトリの生息環境

私は2005年3月、長柄町に飛来したコウノトリを調査したことがあります。飛来地は国指定史跡「長柄横穴群」があり、そのおかげで豊かな谷津田・里山の環境も保全されていました。この古墳群の一角の小さな谷津田に、1羽のコウノトリを発見できました(図2)。最初はあたりをうかがいながら餌をついばんでいたコウノトリですがしばらくすると、こちらに気づいたのが谷津から広い水田地帯に飛んでいきました。案内してくれた地元の方の話では、このコウノトリは、その谷津をねぐらにし周辺の水田を餌場としながら前年の12月から冬を過ごしたとのことでした。

地元の方が「谷津奥に横穴の古墳があり、そこに鳥の絵がある。」とのこと、行ってみることにしました。



図2. 千葉県長柄町の谷津田で越冬したコウノトリ。2005年3月。

暗い杉林の中の崖には、人の背丈ほどの高さで奥行き2~3mの横穴墳が数個あり、その一つの横穴の壁には、建物や人の姿のような絵とともに二羽の鳥の絵を見つけたことができました。その一羽は、トキとおもわれる絵でした(図3)。頭部には冠羽らしきものが描かれ、嘴も長く、トキの姿にそっくりでした。ただもう一羽は、冠羽らしきものがあるものの、嘴が短く、明らかにトキではなさそうでした。もちろん、何の鳥を、またいつ頃に画かれたものであるかは確定できるものではありません。その付近には「鶺谷(とうや)」という地名、また「立鳥」「鶺巣」といった鳥にちなむ地名が多くみられます。

●横穴墳の鳥の壁画の謎

鳥は古来、靈魂を運ぶ聖なるものであるという信仰があり、インドやチベットでは、人の魂を天空の他界に返す葬儀も伝えられています。長柄町の横穴墳の鳥の絵も、葬られた人の靈魂を鳥たちに託す意味だったのではと推測されます。中国では、「トキは「幸せをくれる鳥」と言い、朝鮮では「陽が昇る朝」と見立てられていたといえます。赤い顔に白い冠羽が立派なトキは、日本でも「神鳥」として珍重され、伊勢神宮の遷宮神事では「御刀」の柄にトキの尾羽が用いられてきました。

日本書紀の神話に、天稚彦(あめのわかひこ)の葬のときに「鶺(そび)を以て尸者(ものまさ)とした」といった記述があるそうです。尸者とは、弔問を受ける役割の者のことで、その「鶺(そび)」は、そにとりとも言われるショウビンすなわちカワセミ類のことです。

まさに「鶺谷」とともに長柄町にある「立鳥」の地名ですが、壁画の二羽の鳥はトキと「鶺(そび)」、すなわちカワセミ類、私はこれをヤマセミではないかと推察しました。ヤマセミはトキに比べれば小形ですが、同じように冠羽が特徴的であり、土壁の横穴に巣作りすることから、横穴墳に葬られた人の魂を運ぶ使者とされたのではないかと思います。



図3. ヤマセミ(上)とトキ(下)と思われる横穴墳の壁画。

●コウノトリの分散飼育とトキ再来の夢

千葉県の芝山町に伝わる古墳祭りでは、みんなで古墳時代から飛鳥時代の衣装をまとい、顔の目の回りを赤い三角や丸に染める化粧をします。まるでトキの顔であり、白地に赤の日の丸のデザインや Nipponia nippon の学名にもつながります。かつては秋から冬にかけて毎年飛来したであろうトキ、人々は、先祖の魂とともに幸せを運ぶ空からの使者として崇めていたのかもしれない。

現在、トキやコウノトリをシンボルとして国や県、市町村等が一緒になって、関東に豊かな生物多様性を復活させる生態系ネットワークのプロジェクトが進められています。野田市ではコウノトリの遺伝的多様性を守る分散飼育もはじまりました。新潟県佐渡では放鳥されたトキが野生のヒナをかえしています。今後そのトキが増え、やがて房総の里山に再来する日も遠い夢物語ではないと思います。

(中村 俊彦 千葉県生物多様性センター・県立中央博物館)

生命(いのち)のにぎわい調査団で 現地研修会を開催しました!

調査団の現地研修会を、平成24年11月17日(土)に、～晩秋の里山の生きものを知ろう～「いすみ環境と文化のさとセンターと万木城周辺の生きもの」をテーマに行いました。この現地研修会は、平成25年2月現在で810名を超えた調査団員の観察技術(生物の発見・確認方法や見分け能力)の向上を目指して、開催しています。

当日の参加者は14名で、午前中は時々雨雲の通り過ぎる中、雨合羽を着て、いすみ環境と文化のさとネイチャーセンター周辺を歩きました。ニホンノウサギの畑作物への食害やイノシシの掘り起こし跡、水路の生きものや万木堰の周辺の鳥などを観察しました。午後は風雨が強くなったため、センターの図書室で勉強会とし、「ミヤコタナゴの生息地を守るために」、「野生動物を知る、足跡の見分け等」について、生物多様性センター職員が映像を用いて説明しました。

身近な里山の見慣れた自然環境の中でも、多くの生きものが関わり合っていることを知り、身近な自然を守るためにできることなどの情報を伝えて、調査団員とともに考える研修会となりました。



いすみ環境と文化のさとセンターの湿性生態園



センター内の図書室における勉強会



カヤネズミの草で編んだ巣

＜他に観察した生きもの＞哺乳類に関するもの：カヤネズミの草で編んだ巣、アライグマの足跡と柱の爪痕、ニホンリスとアカネズミが食べたオニグルミの実、ニホンノウサギが食べた大豆の葉、イノシシの掘り起こし跡。鳥類：マヒワ、ウソ、ヤマガラ、シジュウカラ、ウグイス、マガモ、カイツブリ、オオバン、カルガモ。魚類：ギンブナ、両生類：アカガエル、ウシガエル(特定外来生物)、甲殻類：スジエビ。植物：アケビの実、ガマズミの実。地衣類：ウメノキゴケ他。

(柴田 るり子 千葉県生物多様性センター)

生物多様性シンポジウム 「外来生物と印旛沼 —生きものが語る印旛沼の 現在(いま)と未来—」を開催

現在、印旛沼の生態系をおびやかしている、カミツキガメなどの外来生物には、どのような問題があるのでしょうか。千葉県生物多様性センターでは、印旛沼をとりまく自然のかつての姿と現状を知り、外来生物の先進的な防除の取り組みを学ぶシンポジウムを開催しました。総勢140名を超える多くの方々に参加していただき熱気あふれるシンポジウムになりました。

日時：平成25年1月19日(土) 13:00～17:00

場所：佐倉市立中央公民館(佐倉市錦木町)

主催：千葉県環境生活部自然保護課生物多様性センター
協力：印旛沼流域水循環健全化会議、佐倉市、千葉県立中央博物館

プログラム：

あいさつ 今泉光幸(千葉県環境生活部自然保護課長)

講演1 「外来種、アカミミガメ問題：ある水族館の挑戦」 亀崎直樹(神戸市立須磨海浜水族園)

講演2 「印旛沼の生きものたち—今と昔—」 本橋敬之助(財団法人印旛沼環境基金)

- 事例報告1 「印旛沼のカミツキガメ」 高山順子（千葉県生物多様性センター）
- 事例報告2 「かつての印旛沼と漁業」 石井正美（印旛沼漁業協同組合組合員）
- 事例報告3 「印旛沼流域のナガエツルノゲイトウとオオフサモの植生調査」 根本明夫（佐倉印旛沼ネットワークの会）
- 事例報告4 「外来生物の防除を地域力で！」 高橋修（水土里ネット印旛沼）
- 討論：コーディネーター中村俊彦（千葉県生物多様性センター）

シンポジウムに併せて、関係機関によるポスター展示を会場で実施しました。また、故・林辰雄氏が撮影した昭和中期の印旛沼の画像（千葉県立中央博物館所蔵）を、スライドショーとしてスクリーンで上映しました。

参加者に実施したアンケートの結果（有効回答数 87件）をみると、シンポジウムに参加した感想は、「たいへんよかった」・「よかった」を合わせて80.4%、また内容のわかりやすさについては、「よくわかった」・「まあよかった」を合わせて83.9%の結果となりました。

外来種に対してはみんなで力を合わせた駆除等の対策を強化していくとともに豊かな印旛沼の再生を目指すためには、水辺や流域全体の環境改善が必要との意見が多く寄せられました。



シンポジウムのチラシ



会場の様子
(高山 順子 千葉県生物多様性センター)

千葉県の外来種

アメリカオニアザミ（要注意外来生物）



葉、茎、花と全身鋭い刺（とげ）だらけで、とても素手では触れない外来のアザミの1種です。刺がないのは赤紫色をした花の頭部くらいです。日本に侵入したのは半世紀ほど前ですが、県内では北総を中心に、徐々に分布を広げているようです。千葉市にある生物多様性センターの周辺でも目立つようになってきています。茎に緑色の「ひれ」があるのが特徴で、ひれの先が刺になっています。数年成長した後に花が咲くと、タネを飛ばしながら枯れてしまう、1回繁殖型の草本です。

名前からアメリカ原産のように思われますが、実は、ヨーロッパが本当の原産地で、アメリカでもやっかいな外来種として手を焼いています。どうも、アメリカ経由で日本に侵入したことから名がついたようですが、アメリカにとっては迷惑な話で、誤解のないように「セイヨウオニアザミ」と呼ばれるときもあります。

これだけ刺が多いと、痛くて容易に除去できないため、とかく放置されていることが多く、それも分布を広げる一因になっているようです。牧草地に入ると、家畜も嫌うため、どんどん広がってしまうようです。

原産地でもさぞかし嫌われているかと思うと、さにあらずで、イギリスのスコットランドの花として紋章等に描かれているアザミは、おそらくこのアメリカオニアザミがモデルになっていると考えられています。夜襲をかけた敵がアザミを踏んで、痛さのあまりに声を出してしまったために、スコットランド軍が気付いたという伝説があります。日本でも、刺があってもヒイラギの葉を、敵（鬼）を遠ざけるということで、節分に飾るのと共通したのがあります。

痛いからといって除去するのをためらっていると、かえって殖えてしまい、ますます除去が大変になります。小さいときから刺はありますが、小さい方が扱いやすいので、できるだけ早く見つけて除去されることをお勧めします。

（由良 浩 千葉県生物多様性センター）



生物多様性ちばニュースレター No.32 平成25年3月29日発行

編集・発行 千葉県環境生活部自然保護課 自然環境企画室 生物多様性センター

〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2（千葉県立中央博物館内）

TEL 043(265)3601 FAX 043(265)3615 URL <http://www.bdcchiba.jp/index.html>